



上空から見た畑地区。蛇行する最上川に囲まれている。

畑に入ると、グニャリと足が沈み込んだ。ツンとした腐敗臭が鼻をつく。200本の茄子はすべて一方向になぎ倒されている。葉っぱは泥に覆われ、弱々しくぶら下がった果実には白いカビが生えている。畑の淵に目をやると、電信柱が傾き、その向こうをザッと音を立てて川が流れている。氾濫から5日が経過していたが、川はまだ穏やかさを取り戻していなかった。「水害もここに生きる生活の一部です。みんな『まあ仕方ない』っていう感じで、片付けも明日には大体終わります」と、この家に住まう農家・松田佳祐さん(33)は笑った。彼の足元にあるバケツには、ピンクや水色をした手持ち花火の燃えかすが浮かんでいる。昨晩は子どもたちと花火をしたそうだ。「子どもたちには、水害を悲劇ではなくて、なるべく日常の中にあることとして感じてほしいんです。俺も子どものとき、氾濫した水が到達したところに立って『ここまで来たよ』って記念撮影し

たりしてましたから」。

水が上がるまち

山形県新庄市本合海(もとあいかい)畑(はた)地区。最上川が幾重にも蛇行し、水害の頻発地帯である。1年に1回は川沿いの畑が水に浸かり、5年に1回は大水になるため、住民は水害に慣れっただった。雨が降る前に風がビタッと止まる。南から雲が来ると豪雨になる。川が氾濫する前には気温が下がる。住民たちは、こうした経験則と現在の川の水位とを照らし合わせ、緊急事態を知らせるサインよりも先に動き出す。1階の畳を上げ、戸を外し、車を高台に動かし、2階で静かに待つ。そして水が引き始めるや否や、1階に降りて泥水を竹箒でかき混ぜる。そうすると引いていく水が泥をきれいに持ち帰ってくれるのだという。

しかし、そんな百戦錬磨の畑地区の住民にとっても、今年の川は



1.2020年7月29日午前6時30分の畑地区。右手にある最上川が氾濫し、田んぼ、民家を越えて国道が浸水。左側の田んぼも水に浸かっている(松田佳祐さん撮影)。2.松田家は1階部分が倉庫になっているので、床上浸水は免れたが、あふれた水は1mほどの高さになり、倉庫の物は水をかぶった。3.洪水で支柱ごとなぎ倒された畑茄子。川が運んだゴミが引っかかり、根っこが浮き上がっている。

様子がおかしかった。7月28日、昼から激しい雨が降り始めた。1ヶ月以上続いていた断続的な雨のせいです。川の水は高かったため、「水上がってくるかも」と片付けを始めた。17時ごろに雨は止んだが、役所からは避難指示が出ていた。水防団の一員である佳祐さんは、全戸を回って避難を呼びかけたが、普段の洪水の前兆がないとしてみんな半信半疑だった。じきにしみ出るように川の一部分があふれ、1時間に70cmという猛スピードで水が上がってきた。20時には道路が冠水。もう一度集落を回って避難を呼びかけたが、5軒ほどの住人は家にとどまった。雨は止んでいるのに水の勢いは一向に衰えない。誰も経験したことがない奇妙な状況だった。川の水位は上がり続け、これ以上は危険だとして水防団にも解散が告げられる。しかし、集落に人を残して立ち去れない、と佳祐さんは夜通し見張りを続けた。29日の午前3時ごろに水位はピークに達し、5